

現代教養文庫

884

ドグラ・マグラ

夢野久作著

社会思想社

著者略歴

夢野久作（ゆめのきゅうさく）。本名・杉山泰道

1889年 福岡市に生まる

1936年 逝去

〈著書〉「白髪小僧」「あやかしの鼓」（『新青年』創作探偵小説・当選作）「押絵の奇蹟」「犬神博士」「キチガイ地獄」「暗黒公使」「氷の涯」「難船小僧」「木魂」「人間腸結」「ドグラ・マグラ」「近世快人伝」他執筆。四十四年『夢野久作全集』（三一書房）刊行。

〈連絡先〉 福岡市東区大字唐原654 杉山龍丸

〈お願い〉

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考に、よりよい本を作るよう努力しておりますので、本書の読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本についても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もありますので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 884 ドグラ・マグラ

©1976

昭和51年7月30日初版第1刷発行

昭和51年11月30日初版第2刷発行

著 者 夢 野 久 作

発 行 者 小 森 田 一 記

発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1の25の21
電話代表 (03) 813-8101
振替東京 6-71812

現代教養文庫

ドグラ・マグラ

夢野久作傑作選 IV

社会思想社

目 次

ドグラ・マグラ 五

精神操作の恐怖と自由の問題（奈良宏志）

六三

ドグラ・マグラ

卷 頭 歌

胎児よ

胎児よ

何故躍る

母親の心がわかって

おそろしいのか

……ブウウ——ン——ン——ン……。

わたしがウスウスと眼を覚ました時、こうした蜜蜂の唸るような音は、まだ、その弾力の深い余韻を、わたしの耳の穴の中にハッキリと引き残していた。

それをジッと聞いているうちに……今は真夜中だな……と直覚した。そうしてどこか近くでボンボン時計が鳴っているんだな……と思ひ思い、またもウトウトしているうちに、その蜜蜂のうなりのような余韻は、いつとなく次々に消え薄れて行つて、そこいらじゅうがヒッソリと静まり返ってしまった。

わたしはフッと眼を開いた。

かなり高い、白ペンキ塗の天井裏から、薄白い塵埃におおわれた裸の電球がタッタ一つブラ下がっている。その赤黄色く光る硝子球の横腹に、大きな蠅が一匹とまっていて、死んだように凝然としている。その真下の固い、冷めたい人造石の床の上に、わたしは大の字型に長くなって寝ているようである。

……おかしいな……。

わたしは大の字型に凝然としたまま、瞼を一パイに見開いた。そうして眼の球だけをグルリグルリと上下左右に回転さしてみた。

青黒い混凝土の壁で囲まれた二間四方ばかりの部屋である。

その三方の壁に、黒い鉄格子と、鉄網で二重に張りつめた、大きな縦長い磨硝子の窓が一つずつ、つごう三つ取り付けられている、トテも要心堅固に構えた部屋の感じである。

窓のない側の壁のつけ根には、やはり岩乗^{がんじよう}な鉄の寝台が一個、入口の方向を枕にして横たえてあるが、その上の真白な寝具が、キチンと敷^{なら}き展べたままになっているところを見ると、まだだれも寝たことがないらしい。

……おかしいぞ………。

わたしは少し頭を持ち上げて、自分の身体^{からだ}を見廻してみた。

白い、新しいゴワゴワした木綿の着物が二枚重ねて着せてあって、短いガーゼの帯が一本、胸高に結んである。そこから丸々と肥って突き出ている四本の手足は、全体にドス黒く、垢だらけになっている……そのキタナラシサ……。

……いよいよおかしい……。

怖^めわごわ右手をあげて、自分の顔を撫でまわしてみた。

……鼻^とが尖^とんがって……眼が落ちくぼんで……頭髪^{ぼうぼう}が蓬々と乱れて……顎鬚^{あごひげ}がモジャモジャとのびて……。

……わたしはガバと跳ね起きた。

モウ一度、顔を撫でまわしてみた。

そこいらをキョロキョロと見廻した。

……だれだろう……おれはコンナ人間を知らない……。

胸の動悸^{どうき}がみるみる高まった。早鐘を撞くように乱れ撃ちはじめた……呼吸が、それにつれて荒^{あえ}くなった。やがて死ぬかと思うほど喘^{あえ}ぎだした。……かと思うとまた、ヒッソリと静まってき

た。

……こんな不思議なことがあるのか……。

……自分で自分を忘れてしまっている……。

……いくら考えても、どこの何者だか思い出せない。……自分の過去の思い出としては、たった今聞いたブウ——ンンンというボンボン時計の音がタッタ一つ、記憶に残っている。……ソレツキりである……。

……それでいて気は慥かである。森閑とした暗黒が、部屋の外を取巻いて、どこまでもどこまでも続き広がっていることがハッキリと感じられる……。

……夢ではない……たしかに夢では……。

わたしは飛び上った。

……窓の前に駆け寄って、磨硝子の平面を覗いた。そこに映った自分の容貌を見て、何かの記憶を喚び起こそうとした。……しかし、それはなんにもならなかった。磨硝子の表面には、髪の毛のモジャモジャした悪鬼のような、わたし自身の影法師しか映らなかった。

わたしは身を翻して寝台の枕元にある入口の扉に駆け寄った。鍵穴だけがボツンと開いている真鍮の金具に顔を近づけた。けれどもその金具の表面は、わたしの顔を写さなかった。ただ、黄色い薄暗い光を反射するばかりであった。

……寝台の脚を探しまわった。寝具を引っくり返してみた。着ている着物までも帯を解いて裏返して見たけれども、わたしの名前はおろか、頭文字らしいものすら発見しえなかった。

わたしは呆然となった。わたしは依然として未知の世界にいる未知のわたしであった。わたし自身にもだれだかわからないわたしであった。

こう考えているうちに、わたしは、帯を引きずったまま、無限の空間を、ス——ッと垂直に、どこへか落ちて行くような気がしはじめた。臓腑はらわたの底から湧き出してくる戦慄せんりつとともに、われを忘れて大声をあげた。

それは金属性を帯びた、突拍子もない甲高い声かんだかであった……が……その声はわたしに、過去の何事かを思い出させるまもないうちに、四方のコンクリート壁に吸い込まれて、消え失せてしまった。

また叫んだ。……けれどもやはり無駄であった。その声がひとしきりはげしく波動して、渦巻いて、消え去ったあとには、四つの壁と、三つの窓と、一つの扉が、いよいよ厳肅に静まり返っているばかりである。

また叫ぼうとした。……けれどもその声は、まだ声にならないうちに、咽喉のどの奥のほうへ引返してしまった。叫ぶたんびに深まって行く静寂の恐ろしさ……。

奥歯がガチガチと音を立てはじめた。膝頭が自然とガクガクしだした。それでも自分自身が何者であったかを思い出し得ない……その息苦しさ。

わたしは、いつのまにか喘ぎあえはじめていた。叫ぼうにも叫ばれず、出ようにも出られぬ恐怖に包まれて、部屋の中央まんなかに棒立ちになったまま喘いでいた。

……ここは監獄か……精神病院か……。

そう思えば思うほど高まる呼吸の音が、^{こがらし}風のように深夜の四壁に反響するのを聞いていた。

そのうちにわたしは気が遠くなってきた。眼の前がズウ——と真暗くなってきた。そうして棒のように強直した全身に、生汗をビッシヨリと流したまま仰向けざまにスト——ンと、倒れそうになったので、われ知らず観念の眼を閉じた……と思ったが……また、ハッと機械のように足を踏み直した。両眼をカッと見開いて、寝台の向側の^{コンクリート}凝土壁を凝視した。

その凝土壁の向側から、奇妙な声が聞えて来たからであつた。

……それはたしかに若い女の声と思われた。けれども、その音調はトテも人間の肉声とは思えないほど^{しゃが}噎れてしまつて、ただ、底悲しい、痛々しい響きばかりが、凝土の壁を透して来るのであつた。

「……お兄さま。お兄さま。お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま。……モウ一度……今のお声を……聞かしてエ——ッ……」

わたしは愕然として縮み上つた。思わずモウ一度、背後を振り返つた。この部屋の中に、わたし以外の人間が一人もないことを承知しぬいていながら……それからまたも、その女の声を滲み透して来る、コンクリート壁の一部分を、穴のあくほど、凝視した。

「……お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま……お隣のお部屋にいらっしゃるお兄様……あたしです。妾^{めかけ}です。お兄様の許嫁^{いせかけ}だつた……あなたの未来の妻でした妾……あたしです。あたしです。どうぞ……どうぞ今のお声をモウ一度聞かして……聞かしてちょうだい……聞かして……聞かしてエ——ッ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……おにいさまア——ッ……」

わたしは眼瞼^{まぶた}が痛くなるほど両眼を見開いた。唇をアングリと開いた。その声に吸いつけられるようにヒョロヒョロと二、三步前に出た。そうして両手で下腹をシッカリと押えつけた。そのまま一心に混凝土の壁を白眼^{にら}みつけた。

それは聞いている者の心臓を虚空に吊し上げるほどのモノスゴイ純情の叫びであった。臓腑をドン底まで凍らせずにはおかないくらいタマライ絶体絶命の声であった。……いつからわたしを呼びはじめたかわからぬ……そうしてこれから先、何千年、何万年、呼び続けるかわからない、真剣な深い怨みの声であった。それが深夜の混凝土壁の向うからわたし？ を呼びかけているのであった。

「……お兄さま……お兄さま、お兄さま、お兄さま。なぜ……なぜ返事をしてくだらないのですか。あたしです、あたしです、あたしです、あたしです。お兄さまはお忘れになったのですか。……妾^{めかけ}ですよ。あたしですよ。お兄様の許嫁だった……妾……妾をお忘れになったのですか。……妾はお兄様と御一緒になる前の晩に……結婚式を挙げる前の晩の真夜中に、お兄様のお手にかかって死んでしまったのです。……それがチャント生き返って……お墓の中から生き返ってここにいますのですよ。幽霊でも何でもありませんよ……お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま。……なぜ返事をしてくだらないのですか……お兄様はあの時の事をお忘れになったのですか……」

わたしはヨロヨロと背後^{うしろ}に踰^よ越^こした。モウ一度眼を皿のようにしてその声の聞えて来る方向を凝視した……。

……なんという奇怪な言葉だ。

……壁の向うの少女はわたしを知っている。わたしの許嫁だと言っている。……しかもわたしと結婚式を挙げる前の晩に、わたしの手にかかって殺された……そうしてまた、生き返った女だと自分自身で言っている。そうしてわたしと壁一重を隔てた向うの部屋に閉じ籠められたまま、ああして、夜となく昼となく、わたしを呼びかけているらしい。想像も及ばない怪奇な事実を叫びつづけながら、わたしの過去の記憶を喚び起こすべく、死物狂いに努力し続けているらしい。

……キチガイだろうか。

……本気だろうか。

いやいや。キチガイだ、キチガイだ……そんな馬鹿な……不思議なことが……アハハハ……。

わたしは思わず笑いかけたが、その笑いはわたしの顔面筋肉に凍りついたまま動かなくなった。……またもいっそう悲痛な、深刻な声が、混凝土の壁を貫いて来たのだ。笑うにも笑えない……たしかにわたしをわたしと知っている確信にみちみちた……真剣な……凄愴とした……。

「……お兄さま、お兄さま、お兄さま。なぜ、御返事をなさらないのですか。妾がこんなに苦しんでいるのに……タッタ一言……タッタ一言……御返事を……」

「……………」

「……タッタ一言……タッタ一言……御返事をしてくだされば……いいのです。……そうすればこの病院のお医者様に、妾がキチガイでないことが……わかるのです。そうして……お兄様も妾の聲が、おわかりになるようになったことが、院長さんにわかって……御一緒に退院できるのに……お兄様、お兄様、お兄様……何故……御返事をしてくださらないのですか……」

「……………」

「……妾の苦しみが、おわかりにならないのですか……毎日毎日……毎夜毎夜、こうしてお呼びしている声が、お兄様のお耳に入らないのですか……ああ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……あんまりです、あんまりです、あんまりです……あ……あ……あたしは……声がもう……」

そう言ううちに壁の向側から、モウ一つ別の新しい物音が聞えはじめた。それは平手か、コブシかわからないが、とにかく生身の柔らかい手で、コンクリートの壁をポトポトとたたく音であった。皮膚が破れ肉が裂けてもかまわない意気組で叩き続ける弱々しい女の手の音であった。わたしはその壁の向うに飛び散り、粘りついでいるであろう血の痕跡あとを想像しながら、なおも一心に眼を睜みはり、奥歯を噛みしめていた。

「……お兄様、お兄様、お兄様……お兄様のお手にかかって死んだあたしです。そうして生き返っている妾です。お兄様よりほかに頼りする方は一人もないかわいそうな妹です。一人ポッチでここにいる……お兄様は妾をお忘れになったのですか……」

「……………」

「お兄様もおんなじです。世界中にタッタ二人の妾たちがここにいます。そうして他人ひとからキチガイと思われて、この病院に離ればなれになって閉じ籠められているのです」

「……………」

「お兄様が返事をしてくだされば……妾の言う事がホントのことになるのです。妾を思い出してください。妾も……お兄様も、精神病患者でないことがわかるのです……タッタ一言……タッタ

ターコト……御返事をしてくだされば……モヨコと……妾の名前を呼んでくだされば……ああ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……ああ……妾は、もう声が……眼が……眼が暗くなって……」

わたしは思わず寝台の上に飛乗った。その声のあたりと思われる青黒い混凝土壁に縋り付いた。すぐにも返事をしてやりたい……少女の苦しみを助けてやりたい……そうしてわたし自身がどこかの何者かという事実を一刻も早く確かめたいという、タマライナイ衝動に駆られてそうしたのであった。……が……またグット唾液を嚥んで思い止まった。

ソロソロと寝台の上から迂り降りた。その壁の一点を凝視したまま、できるだけその声から遠ざかるべく、正反対の位置にある窓のところまでジリジリと後退りをしてきた。

……わたしは返事ができなかったのだ。否……返事をしてはいけなかったのだ。

わたしは彼女がわたしの妻なのかどうか、全然知らない人間ではないか。あれほどに深刻な、痛々しい彼女の純情の叫び声を聞きながら、その顔すらも思い出しえないわたしではないか。自分の過去の真実の記憶として喚び起こしうるものはタッタ今聞いた……ブウウン——ンンン……という時計の音一つしかないという世にも不可思議な痴呆患者のわたしではないか。

そのわたしが、どうして彼女の夫として返事してやることができよう。たとい返事をしてやったおかげで、わたしの自由が得られるようなことがあったとしても、その時にわたしのホントウの氏素性や、間違いのない本名が聞かれるかどうか、わかったものではないではないか。……彼女がはたして正気なのか、それとも精神病患者なのかすら、判断する根拠を持たないわたしでは